

梅雨に思う

梅村 とも子

夏の風物詩がまたひとつ減りつつあるのだな
あと寂しくなる。

子どもの頃、家の近くに大川と呼ばれる幅
七メートルほどの川があった。そこには源氏
蛭が群生しており、そこでの蛭狩りは、近所
の子どものための梅雨の時期の楽しみとなつて
いた。

私たち姉弟も、父の帰りを待つては、蛭を
捕えるための竹ぼうきと採つた蛭を入れるた
めの封筒を持って出かけたものだった。懐中
電灯の光を頼りに田んぼ道を行くと、やがて
大川の橋に出る。耳を打つ水の音と土手の笹
竹の葉ずれの音。数えきれないほどの蛭が光
の飛跡を描いていた光景は、構図のように私
の記憶に残っている。

橋の上で父は竹ぼうきを振り回して穂先に
蛭をひっかけてくれる。私たちは、ひっかか
った蛭を逃がさないようにはずして封筒の中
に入れ、息をひそめてのぞき込んだ。捕えら
れた蛭は家まで連れ帰られ、庭に、時には子
どもたちの蚊帳の中に放される。黒いちっば
けな虫が、どうしてあんなふうに光るのだろ
う。暗い蚊帳の中でいつまでも眼を光らせて
いたこともあった。

七月の声を聞くと、蛭狩りの季節は終りに
思ってしまうが大真面目の報道に、日本の

なる。「七月の蛭は病蛭^{やまいばた}」と言われ、採って
はならないと言ひ聞かされて育つた。あるい
は蛭を保護するための言い習わしだったのか
も知れないが、私たちは忠実にその教えを守
っていた。

今では大川はコンクリートの用水路となり
田んぼ道も舗装されて広い道になってしまつ
た。蛭も以前ほどは見られなくなったそうだ
が、蛭にまつわる思い出は鮮明で、故郷をな
つかしむ気持と共に、何かの拍子にふと甦つ
て来る。

また雨が降つて来た。急ぎ足になりながら
心はまだ大阪の観賞会のことを思う。金網の
かごの中で、蛭はどんな命を燃やしたのだろ
う。立ち止まることもできずに金網ごしの蛭
を見た子どもたちは、小さな光がひとつの命
を持つ虫であることに気付いただろうか。私
は、その子どもたちに竹ぼうきを持たせて、
梅雨の湿つた田んぼ道で蛭を追わせてみたい
と思うのである。

(うめむら ともこ 教務課課員)